

ぞうの インディラ

あきおは、おじいちゃんと 上野どうぶつ園に 行くことになりました。

「ぼく、ぞうや パンダを 見るのが とても 楽しみだな。」

と、上野公園を ゆっくり 歩きながら あきおが 言うと、おじいちゃんは 思い出したように 子どもの ころの 話を はじめました。



せんそうが おわったばかりの ころは、ものが なくて、食べるのも やつとでね。絵本や あそび道具もない。だから、そのころの 子どもたちにとって、どうぶつ園に行くことは、大きな 楽しみだったんだよ。ところが、せんそうで 上野どうぶつ園に いたぞうは、みんな いなくなっ て しまったんだ。

「ぞうに 会いたい。」

ぞうの インディラ

子どもたちは、みんなで 声をあげた。すると、その 声は インドの 国の ネルー
首しようまで とどいたんだ。

ネルー首しようは、

「インドの 子どもたちから 日本の 子どもたちへの おくりものです。」

と、自分の おすすめの 名前をつけた ぞうを 上野

どうぶつ園に おくって くれた。

その ぞうの 名前は、「インディラ」。

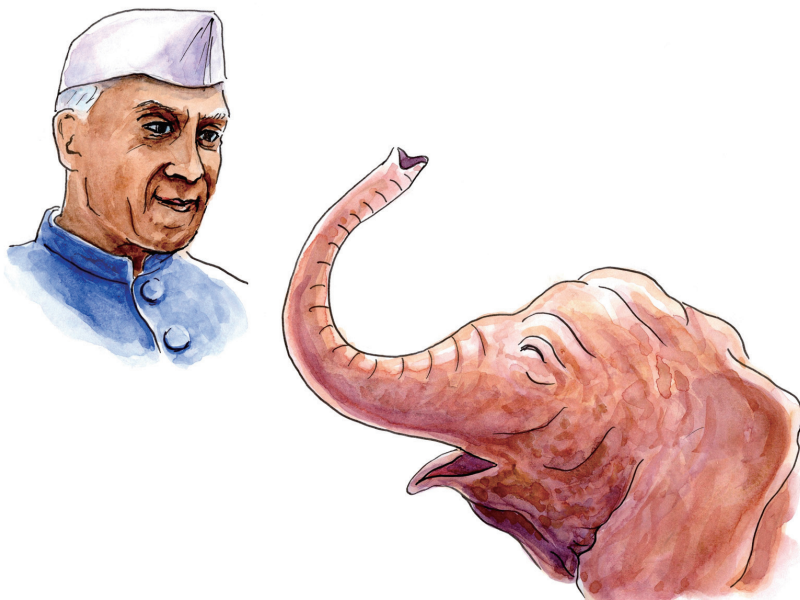
おじいちゃんは、どうしても インディラに 会いた

くて 上野どうぶつ園に 行ったんだ。すると、たくさ

んの 人が 見に来て、インディラは 大人気

だった。大きな 体に やさしい 目。大きな 耳を

ゆらゆら うごかしながら こっちを 見て いたよ。



その後、インディラは、日本中を回って子どもたちをよろこばせたんだ。



話しおわると、おじいちゃんは、ぼくと手をつないで、どうぶつ園の入り口におかいました。

「ぼくもインディラに会いたいな。今も上野どうぶつ園にいるの？」

とあきおがきくと、おじいちゃんは、

「いや、もう生きてはいないんだ。今はインドの子どもたちとのすてきな思い出
出として多くの人の心の中にいるんだよ。」

と、目を細めてやさしく教えてくれました。

「おじいちゃん、インディラは、インドと日本をなかよしにしたんだね。」

「そうだよ。インディラが日本に来てくれたから、インドともっとなかよしになれたんだ。そうだ、あきおはパンダも見たいと言っていたね。パンダは、中国か

ぞうの インディラ



ら 来^きたんだよ。」

「そうかあ。ほかにも 外国^{がいこく}から 来^きて いる どうぶつが いるんだね。」
あきおは そう 言^いうと、どうぶつたちに 会^あうのが ますます 楽^{たの}しみに なりました。

(鈴木 裕子 作)